

地域学習からみえるもの

写真・文 鳥取県立智頭農林高等学校



地理教育のなかで必要性がうたわれているものの、なかなか実施できていなかった地域調査に取り組んだ。本校の位置する鳥取県八頭郡智頭町は県の東南部に位置し、周囲を山に囲まれた典型的な中山間地域である（写真①）。このような地域で派生する課題とは、多くの地域がそうであるように、人口流出に伴う地域経済、地域コミュニティの崩壊である。本町も1970年代には1万2000人の人口を維持していたが、2010年には8000人を割り込むようになっている。この影響が最も顕著に現れている中心商店街への個別訪問と、山間地域にある集落での聞き取り調査を行った。

中心商店街では、シャッターを降ろした店舗や空き地が目につき、人通りもほとんどない。生徒たちの聞き取りのようすを側で聞いていると、「もうこんなになっちゃって…」という店主たちの諦めにも近い嘆きの声が聞こえてきた（写真③）。聞き取りデータを起こし、観察したデータを地図に記入していく。意味のある活動に参加することは、そのプロセスのなかで必ず言葉を媒介とした言語活動が伴ってくる（写真④）。

一方、町の中心部から車で15分程度の距離（標高差270m）の山中にある板井原集落は、昭和30年代の山村集落の遺構を色濃く残していることから、鳥取県の伝統的建造物群保存地区に指定されている。中央のメディアで取りあげられることもあり、年間1万人近くの観光客が訪れる智頭町の観光名所の一つでもある。かつては23戸の居住者がいたが、生活の困難さから30年ほど前から智頭町の中心

部への移住が進み、現在では通年で居住しているのは2戸のみである。日中に畑仕事などのために通ってくる10世帯ほどの「通いの住民」によってかろうじて集落が維持されている。いわば限界集落をはるかに超えた「超限界集落」である（写真②）。この集落の実態に迫るためには、地域の住民と関わることによってしかできない。「（1mを越す）雪の重みで屋根が壊れると、（そこに住んでいないのでお金をかけて）修理することはねーな」。住民の方から出てくる言葉に、この集落を維持していくことの困難さを実感する。生徒たちの反応も「川の水がとてもきれい。自然がいっぱい素敵なところなのに後継者がいないのが残念」と自分の感覚を素直に表現している（写真⑤）。

地域学習の授業では、地元の商工会や町役場から資料を入手し、それをもとに地域の傾向を把握することは十分可能である。しかし、そこには数字やグラフの裏にある人々の生活や息づかいは伝わってこない。地域の人と関わるのが、地域の課題を自分ごととしてとらえ、「なんとかせなあいけん」と思えるかどうか、地域を担う人材の育成につながることになる。地域の課題は地域ごとに異なりその答えはない。問題点は把握できたとしても、その先の答えは教科書には書いていないだけでなく、実は誰もわかっていない。オープンエンドな課題を自分ごととしてとらえ、その解決に向かった何らかの活動に参画できるかが、現地調査を介した地理教育に求められている。